

マルクス経済学の教育にかんする一考察

齊 藤 彰 一¹⁾

第1章 問題の所在

なぜマルクス経済学²⁾の原論にたいして大学生は魅力を感じないのか。この点を考察するのがこの論考の目的である。

マルクス経済学は、いわゆる非主流派に分類される。主流派というのはいわゆる新古典派と呼ばれる新自由主義の経済学の総称である。非主流派にはいくつかのシュレーがあり、マルクス経済学(正統派)、マルクス経済学(宇野学派)、レギュラシオン学派、進化経済学そしてラディカル・エコノミクス等といったものがある。また主流派といっても、決して一枚板ではなく、現在さまざまな種類を数えることができるが、しかし、資本主義経済が特段の改革なしに発展してゆくと前提をもっているという点で同じである。彼らは主流派³⁾を形成している。この主流派の経済学は、げんざい日本の多数の大学の経済学部⁴⁾においてメインストリームを形成している。したがって、言うまでもないことであるが、日本の大学教育における経済学教育においては、学生は特別な疑問をもつことなく、新古典派の思考ツールを前提とした教育を受けることになる。

ところが、現在の日本におけるマルクス経済学を取り巻く環境はけっして悪いものではない。たしかに1989年にベルリンの壁は崩壊し、1991年にはソビエト連邦は崩壊した。あの時代とその後の数年は、マルクス経済学にとって戦後最悪の時期であった。しかし現在はそうとは言えない。ソ連をはじめとする東側社会主義世界の崩壊は、現代の大学生は知識として知っている。しかし、それら事実付随せる衝撃を、いまの大学生は有しているとはいえない。また資本主義も、2008年のリーマン・ショックにみるごとく、決して万全なる支持を得ているとは言えない。その後はマルクス・ブームが起きてさまざまな『資本論』解説書が書かれ、読ま

1) 岩手大学人文社会科学部准教授

2) この論考で単に「マルクス経済学」と書いた場合、主として「正統派マルクス経済学」、「宇野派マルクス経済学」の二つを指すこととする。

3) 日本における経済学の主流派が、みずからの流派を国の制度として位置づけようという動きがあった。それがいわゆる「日本学術会議の「参照基準(専門分野経済学)」をめぐる経緯をかたちづけている。これらの経緯および主流派・非主流派の両派の関係をめぐる議論は、八木紀一郎ほか編『経済学と経済教育の未来 日本学術会議<参照基準>を超えて』(2015年、桜井書店)が詳しい。また現代日本におけるマルクス経済学の立ち位置についての簡潔な説明は八木紀一郎「日本アカデミズムのなかのマルクス経済学」(2019年、『現代の理論』第16号)において行われている。

4) 経済学を教える大学・学部は経済学部には限らない。教育学部の社会科教育もそうであり、あるいは筆者の所属する岩手大学人文社会科学部という総合学部もそうである。また農学部の農業経済学もまた経済学教育の場であると言いうる。この論考では経済学が講義される場を特に限定することはしない。

れ、あるいはトマ・ピケティの『21世紀の資本』にみるごとく、資本主義的生産が多大なる格差を生むという懸念は現代において非常に広がっている。したがって、『資本論』の講義を行う大学の「政治経済学」「社会経済学」あるいは「経済原論」という科目が、学生の目にとまらないはずはないのである。

また大学の専門教育課程におけるマルクス経済学原論は、けっして不人気な科目ではない。筆者は専門科目である「政治経済学Ⅰ」「政治経済学Ⅱ」を担当している。これらの科目の受講学生数は、2019年度の前期においては44名であった。毎年ほぼこの程度の受講者がある。これは地方国立大学の総合科学部の専門教育課程の受講者としては決して少ないほうではない。しかし問題は、マルクス経済学の演習つまり「政治経済学演習Ⅰ・Ⅱ」に学生が集まらないということなのである。近年のマルクス・ブームにも関わらず、その演習の受講生の数は低位のままにとどまっているのである。

本論文で問題とするのはここである。現在の大学生はマルクスにたいする歪んだ偏見をもっていない（ごくたまにはいるが例外的である）。それにも関わらず演習に学生が登録してこないというのは、主流派・近代経済学の優位性とは別個に、そのマルクス経済学教育の内部に原因があるのではあるまいか。そのように思われるのである⁵⁾。

マルクス経済学あるいは政治経済学の演習を受講する学生がすくないというのは、おそらく全国的な傾向であると思われる。むしろ他の新自由主義的な授業によって影響されているという面を否定することはできない。しかし受講生の少ない理由は、マルクス経済学の演習の内容というより、それ以前の専門授業（たとえば政治経済学あるいは社会経済学）の内容や講義のやり方に問題があると思われるのである。そしてその問題のために、マルクス経済学原論は、学生の視点からみれば経済学の一種とはみなされない。経済学の一種とみなされないのであれば、マルクス経済学原論の演習授業を登録する学生がとうぜん少なくなるであろう⁶⁾。

したがって、マルクス経済学の授業、つまり『資本論』を解説する授業にどのような困難があるか、という点から考察してみたいと思う。つまりこの論考は、経済学の教育論である。マルクス経済学をどのように教えるかという問題は、従来、経済学教育論において決して無視されていたわけではない⁷⁾。しかしその数は少ない故、特別の方法論があるわけではない。したがってこの論考では特定の方法論に依拠することはできず、いわば徒手空拳で考察を勧めてゆくほかはない。その点は留意されたい。

5) 筆者が勤務している岩手大学の人文社会科学部では、他方で筆者の「政治経済学演習」は、毎年1人から2人程度が受講してくるのが通常であった。

6) もちろん専門授業における技術的な工夫は行うに越したことはない。どんな授業でも行っていると思うが、授業で多種多量の資料類を配布することは、一般的には授業理解のために非常に役立つ。多数の具体的数値の描かれた実証的な参考資料を大量に配布するといった手段もある。こうした授業を楽しくわかりやすくする手段は、あまたあるであろう。たとえば新聞記事を活用する手段も可能である。授業に新聞記事を活用する点は、原島正衛・勝村務「新聞活用授業の展開」（『北星論集（経）』第55巻第2号、2016年）を参照されたい。ここでは大学生の学力向上のための新聞記事活用の必要性が論じられている。

7) たとえば、山根栄次「中学校におけるマルクス経済学に基づいた経済教育の問題—安井俊夫氏の「利潤が生まれるわけ」の授業を参考として—」（『筑波社会科研究』第七号（1988））といった研究である。ただしこれは大学生を対象とした授業内容ではなく、中学校におけるそれを取り扱っている。また、労働価値学説を授業の内容としていない。またベルリンの壁崩壊以前の状況を考察したものであるから、本稿の参考とはしない。

第2章 マルクス経済学の授業を大学で教えることは困難か

経済学の授業でマルクスの『資本論』を教えることには独特の困難がある。それは、『資本論』の場合、マルクスの想定していた読者がきわめて限定されていたからである。『資本論』は、その副題にあるごとく、その目的は「経済学批判 Kritik der politischen Ökonomie」である。つまり、古典派経済学をはじめとする過去のあらゆる経済学を批判したうえで書かれている。つまり、マルクスが想定していた読者とは、古典派・ブルジョア経済学を知っている人々である。また、弁証法という叙述の方法、歴史の見方に関する方法がある程度もっている読者である。また、本のそこかしこにちりばめられている文学的・芸術的知識を理解しうる読者である。こういうことを鑑みれば、『資本論』の読者とは、19世紀の経済学および哲学にかんして或る程度の知識を有する知識人層であると言いうるであろう。『資本論』第1部第2版へのマルクスの「あと書き」には次のように書かれている。

『資本論』がドイツの労働者階級の広い範囲にわたって急速に理解されだしたことは、私の仕事への最高の報酬である。《中略》ドイツ人の世襲財産とみなされていたあの偉大な理論的感覚が、ドイツのいわゆる教養階級からはすっかり失われてしまい、それに反してドイツの労働者階級のなかで新たに復活している、とのことである。⁸⁾

ここではマルクスは労働者階級が『資本論』を理解しだしたことを喜ばしく捉えているが、言い換えればもともとマルクスが『資本論』を労働者階級向けには書く意図はなかったということが現れていると言えよう⁹⁾。

したがって、現代の21世紀の日本でマルクスの『資本論』を大学生に教えるにはこうした困難があることを指摘しておかなくてはならない。

しかし、これは『資本論』にのみ当てはまる特別の理由とはいえない。なぜなら、過去から現在に至るまで日本の経済学界の特徴というものは、外国からの輸入学問であるからである。つまり日本で講義される経済学の大部分は輸入学問である。それら輸入学問たる経済学は、日本の大学生に受容されなくてはならず、また実際に受容されているのだから、『資本論』だけが特別にその普及に困難を有しているということとはできない。

むしろマルクス経済学は日本においては、その解説書や講師の数は他の先進資本主義国よりもはるかに多いのだから、大学生や労働者・市民はそれを受容しやすい環境は十分にあると言えるのである。まずその点からみてみよう。

第3章 現代日本における『資本論』の普及活動とその問題点

ここで、「普及」と言った場合、労働者・市民に対するものだけでなく、大学の教室で行わ

8) K. Marx Das Kapital (Marx-Engels Werke 23 S.19)

9) しかしだからといってマルクスが『資本論』の内容を労働者に紹介することを怠っていたとは言えない。マルクスは1865年に「国際労働者協会」で講演を行っているが、その内容はのち『賃金・価格・利潤』として著作として発行され、労働者向けの『資本論』の易しいテキストとして迎えられている。

れる経済原論（政治経済学あるいは社会経済学）の授業も含まれる。我が国では、この普及という点に関する限り、歴史的には他の先進資本主義国の追随を許さない格好となっている。この点については、これまで出版された『資本論』の解説書を紹介するだけで事足りるであろう。筆者は次にいくつかの書物の特徴を挙げ、それについてコメントを付してゆこうと思う。

1) 金子ハルオ『経済学 上 資本主義の基本的理論』¹⁰⁾

これは1968年に出版されたきわめてすぐれたテキストである。1978年までに第32刷を経ている。このテキストでは最初のほぼ半分のページを『資本論』第一部の説明にあてており、残りの後半部分を第二部・第三部の説明にあてている。『資本論』全三部のもっとも重要な部分をわかりやすく解説したものである。この本は大学生の読者だけでなく、労働者・市民に向けて書かれたものである¹¹⁾。この本のすぐれたところは、あちこちに「討論問題」が付されていることである。たとえば第6章「賃金（一）」では次のような「討論問題」が付されている。

1. 資本主義の搾取とそれ以前の搾取とは、どういうちがった性質をもっていますか。
2. 資本家は世の中はいつでも「かせぐに追いつく貧乏なし」であって、労働者はただ一生懸命に働けば賃金が上がる（逆にいえば、賃金が低いのはまだ働きが足りないからである）といっていますが、ほんとうでしょうか。¹²⁾

以上の「討論問題」はたしかにディスカッションの議題としては悪いものではない。しかしこれらの問題はいくら討論しても、あるいはいくら考えたところで解答はただ一つしかありえない。つまり、ディスカッションの問題は存在するが、基本的には解答はひとつである。つまり、討論問題は、この著書の内容（あるいは『資本論』）の内容を理解するという目的のためだけに存在するのである。『資本論』の理解のためのディスカッションは存在しているが、複数のありうる対立せる意見を戦わせる「討論問題」ではないのである。この点はのちに重要になってくるので留意されたい。

2) 宮川彰の種々のテキスト

宮川彰は現在（2019年現在）、労働者・市民にむけて『資本論』の講義を精力的に行っている。したがって、その講義に関連するテキストは多種を数えることができる。この論考では、

- a) 『『資本論』第1巻を学ぶ 宮川彰 講義録』（ほっとブックス新栄、2006年）
- b) 『『資本論』第2・3巻を読む 上』（学習の友社、2001年）
- c) 『『資本論』第2・3巻を読む 下』（学習の友社、2001年）

の紹介を試みる¹³⁾。これらのテキストは、神奈川県労働者学習協会主催のさいの講義の記録を

10) 金子ハルオ『経済学 上』（新日本出版社、1968年）。この本も含めて戦後に出版された『資本論』の解説書あるいは教科書はあまたあるのであり、ここでは紹介しきれない。それらの書物は、『新メガ第II部（『資本論』および準備労作）関連内外研究文献 マルクス/エンゲルス著作邦訳史集成』（大村泉・宮川彰編、八潮社、1999年）のpp.123-125 にリスト・アップされているので、それを参照されたい。

11) なおこの本の「下巻」では林直道がレーニン『帝国主義論』の解説を書いている。

12) 上掲、金子 [1968] p.122.

13) これらのほかに、『宮川彰 資本論講座 第2・3巻講義要綱』（ほっとブックス新栄、2002年）がある。これは名古屋資本論講座ボランティアが編集したものであり、講義のためのレジュメを取録したものである。内容はむろん詳細を極めたものであり、その解説は優れたものである。

もとに書かれている。『資本論』の第1巻・第2巻・第3巻をすみずみに至るまで詳しい説明がなされている。またこれらに加えて、『『資本論』で読み解く現代の貧富の格差』¹⁴⁾といった現状分析・批判の本も出版されている。『資本論』の第1巻から第3巻までこれほど細かい解説をおこなった書物は、私の知る限りこれが初めてである¹⁵⁾。その詳細さは他に類をみない。これらの本の目的として宮川は次のように述べている。

『資本論』を学習するという意義は、いちばん公約数的なところ、近代資本主義についての科学的認識および方法を獲得すること、それによって合理的な批判的な精神、言いかえれば科学的な見方や方法を身につける。そして、凡俗を排し、俗物根性、奴隷根性をたたき直して、近代賃金労働者の立場と人類史における労働者階級の歴史的使命とを自覚して、一言いかえれば、階級意識に目覚めるというわけですね。—それでもって社会進歩と革新の側に立つ、と。こんなあたりでくくれると思いますね。¹⁶⁾

この本は大学生向けというより、労働者・市民に向けて書かれたものである。そしてその本（あるいは講座）を読む（あるいは受講する）目的というのは、科学的思考を身に付け、ただし政治的立場を確立するということである。

この目的は正しい。しかし大学生を相手に授業を行うためには十分ではない。なぜかという、たとえば経済学部の大学生はマルクス経済学原論だけでなく、さまざまな授業を受けているからである。それは新自由主義を分析ツールとした領域や、あるいは経営学や会計学といった、やや実的な領域の学問もある。（「实际的」と言ったが、实际的な学問など存在しない。非実的なものだけが真に役立つのである。経営学や会計学が「实际的」というのは学問の本来の性格のことを指しているのではなく、若干の学生がそう見ている場合が多いということである）

経済学部の大学生にとっては『資本論』だけが科学ではない。ここでは科学の定義がいかなるものかという問いは捨象する。大学生にとってすべての学問、あるいは経済・経営領域は科学的である。マルクス経済学だけが科学などといっても大学生には理解できない。たしかにマルクス経済学を学ぶことによってしか、近代資本主義社会の本質は明らかにはならない。これは正しい。しかしそれは学問の分野における正しさであって、大学生にとっての正しさをなすものではない。大学生にマルクス経済学（とくに原論）を教える場合には、他の条件が必要になるのである。宮川の各書は『資本論』解説書としてその内容は群を抜いたものであるが、大

14) 『『資本論』で読み解く現代の貧富の格差—宮川彰「資本論」集中講座講義録』[2006]（ほっとブックス新栄）。また『学びたいあなたのための『資本論』Q&A 222問—宮川彰—「資本論」講座Q&A—』（ほっとブックス新栄、2006年）がある。これらは労働者・市民向けに著されたものであるが、『資本論』を基礎とした日本経済にたいする現状分析を行っている。

15) おそらくマルクス経済学の歴史上はじめての労作であろう。

16) 宮川彰 [2006] 『『資本論』第1巻を学ぶ 宮川彰 講義録』（ほっとブックス新栄、pp36-737.なお『『資本論』と経済学教室の60年 労教協の学習運動をふりかえって 辻岡靖仁さんに聞く』（雑誌『経済』212号、2013年5月）では辻岡氏はこう述べている。「労働者は経済要求、とくに賃金、雇用、時間短縮などの要求実現と、組合運動の積極的推進をめざして学習しようという動機が圧倒的に多いのも特徴です。経済学を学ぶことを通して、単に当面の経済的諸欲求の実現ばかりでなく、苦しみの根源としての資本主義の搾取の仕組みを学び、社会変革の必要性、必然性を理解し、労働者階級としての自覚を身に付けて成長していくことになるのです」（p118）。労働者ばかりでなく、未来の労働者階級である大学生を教育するさいにもこの視点は忘れてはならないだろう。

学生をこの学問領域に導くための条件を備えているということではできない¹⁷⁾。

3) 小幡道昭 [2009] 『経済原論 基礎と演習』(東京大学出版会)

小幡は宇野派マルクス経済学の原理論の研究者である。このテキストは主として大学生のための経済学テキストとして書かれたものであるが、これまでの原論テキストとは趣を異としている。このテキストは、「問題」が155個掲載され、それに対する解答が書かれるという独特の形式となっている。それら問題は、宇野弘蔵の『経済原論』に沿った問題もある。たとえば「第I篇 流通論」(『資本論』の商品・貨幣論に該当する)、「第II篇 生産論」(『資本論』の第1部・第2部に該当する)そして「第III篇」(これは『資本論』の第3部に該当する)といった区分けがされている。むろん宇野『経済原論』の内容も踏まえられているが、小幡独自の問題定式に沿ったものもある。たとえば、「開口部」と「変容」といった概念は小幡独自のものである。純粋資本主義には、経済原論の概念ではただちに規定しえない部分があり、それを開口部と称する。以上のように小幡独自の概念を使いながら、「問題」が付されそれに対応する「解答」において詳しい説明がなされる。このテキストの目的は、学生に原論の内容を積極的に考えさせるというものである。そういう意味では従来のテキストとは趣を異にしている¹⁸⁾。

4) 『学説史』から始める経済学 剰余価値とは何か¹⁹⁾

これは筆者・齊藤を含めた共著の教科書であり、前半部分に末永茂喜の『経済学史』(三笠書房、1952年)の復刻版を配置し、後半部分において『資本論』第1部の解説がなされているという形になっている。これは現在、岩手大学にて筆者・齊藤が「政治経済学I」において使用しているテキストである。この本を書いた理由は、『資本論』を「剰余価値学説史」の知識を前提として読むと、学生が容易に理解しようという予測があったためである。

この本の後半部分の目次は次のようになっている。

第II部 『資本論』の剰余価値論—その核心・現代的意義

序章 『資本論』執筆当時の労働者の状態—19世紀中葉、イギリスにおける格差社会—

第1章 価値

第2章 剰余価値の生成

第3章 剰余価値と剰余労働 J.S.ミル、ディルク

17) 言っておかなければならないが、大谷禎之介『図解 社会経済学』(桜井書店、2001)は、『資本論』の授業のための最もすぐれた教科書である。ただし筆者のゼミ生に読ませたところ内容が難解であると指摘がなされた。大学の専門授業や演習の教科書としては難解であると思われる。この本を読みこなすためには最低でも大学院レベルの学力が必要なのではないだろうか。それゆえ、この論考で取り扱うことはできない。

18) 宇野派マルクス経済学において原論テキストは多く書かれている。小幡のテキストはそのテキスト群の最新のひとつに位置付けられる。小幡のテキストもそうであるが、もともと経済学のテキストとして問題演習を行うというのは、宇野弘蔵の時代からあった。たとえば『経済学演習講座 経済原論 問題と解答』(『宇野弘蔵著作集 第二巻』)に所収)

19) 『学説史』から始める経済学 剰余価値とは何か(大村泉・宮川彰・大和田寛 編、八朔社、2009年)。『学説史』とはマルクスの『剰余価値学説史』(いわゆる1861-63年草稿の一部)のことであり、経済学史を前提的な知識とすれば学生の理解も深まるという見込みのもとに書かれた。この本は2008年のリーマン・ショックが起った際、マルクス経済学の普及を見込んで書かれたものである。なお齊藤は、第II部第3・6章およびコラム①②④を担当した。

- 第4章 労働日と剰余価値の生産
- 第5章 生産力の発展と剰余価値
- 第6章 労賃
- 第7章 資本蓄積と分配問題の原理的解明
- 第8章 資本主義的蓄積の一般的法則と現代社会

となっている。そしてマルクス経済学に親しみをもってもらうために「河上肇と『貧乏物語』」²⁰⁾、「小林多喜二とその作品」、学習案内として「インターネットで学ぶマルクス」「マルクス/エンゲルス 文献」といったコラムを配置している。なお貨幣論と本源的蓄積は割愛している。

このテキストにはいっさい問題演習が存在しないので、筆者は配布物として専門用語や計算問題演習等を行わせている。解答用紙は用意せず、一定の時間をもうけて問題演習を行わせ、黒板にて解答と計算根拠等を示して行うようにしている。以下、いくつかの例を示す。

政治経済学Ⅰ 確認問題 第1回講義

商品には二つの性質がある。それは (①) と (②) である。①の原因は (③) であり、②の原因は (④) である。

もしその商品が4時間で生産されるならば、その商品は4000円である。5時間で生産されるならば (⑤) 円である。6時間ならば (⑥) 円である。

4000円の商品が、たとえば8個の生産物であるとする。一つの商品の価値は (⑦) 円ということになる。

貨幣とは (⑧) のことである。

ある商品が、自分の価値を(他の商品の量によって)表現したいとすれば、その商品は (⑨) 形態にあるという。

またある商品が、他の商品の価値を表現するために使われる場合には、その商品は (⑩) 形態であるという。

以上は専門用語の穴埋め問題である。これを馬鹿馬鹿しいと思うひとは多いかもしれない。しかし現代の大学生への教育はこういうところから始めねばならないのである。次に剰余価値論における計算問題を付す。

労働時間の長さ、労働生産力および労働強度についての問題演習

労働時間の長さについて

1) 8時間の労働時間があり、そのうちの4時間は必要労働時間であり、4時間を剰余労働時間とする。1時間の労働時間は1000円に対象化される。このとき剰余価値は () 円であり、剰余価値率は () %である。

2) その労働時間が10時間に延長された。このとき剰余価値は () 円であり、剰余価値率は () %である。

20) なお河上肇は高校日本史では著名人物として紹介されており、高校の日本史Bの教科書11冊のうち8冊に、日本史教科書A7冊のうち6冊に掲載されている。『改訂版 日本史B用語集』[2009] (山川出版社) による。したがって河上肇の名は大学生にとって、かなりの程度、知られているものと考えられる。

3) その労働時間が12時間となった。このとき剰余価値は()円であり、剰余価値率は()%である。

4) その労働時間が16時間となった。このとき剰余価値は()円であり、剰余価値率は()%である。

労働生産力について

1) 8時間の労働時間があり、その労働時間で8個の生産物を生産していた。剰余価値率は100%であった。そのうち剰余生産物は()個である。

2) 8時間の労働時間があり、生産物を8個作っていた。このとき剰余価値率は()%であった。ここで労働生産力が二倍となった。このとき8時間でつくられる生産物は()個であり、1個の価値は()円である。このとき剰余価値は()円であり、剰余価値率は()%である。

3) 12時間の労働時間があり、生産物を12個作っていた。1個あたりの価値は600円であった。このとき、剰余価値率は100%であった。労働生産力が3倍になった。このとき1個あたりの価値は()円となり、剰余価値は()円であり、剰余価値率は()%である。

4) 10時間の労働時間があり、生産物を10個作っていた。剰余価値率は100%である。労働生産力が4倍となった。このとき、生産物の量は()個であり、剰余価値は()円であり、剰余価値率は()%である。

労働強化について

1) 8時間の労働時間があった。1時間で1個の生産物が作られていた。1個の価値は1000円であった。このとき労働強度が二倍となった。このとき労働生産物は()個となり、1個あたりの価値は()円であり、剰余価値率は()%となった。

2) 10時間の労働時間があった。1時間で一個の生産物がつくられていた。1個の価値は1000円であった。剰余価値率は100%であった。このとき労働が二倍に強化された。このとき剰余生産物は()個になり、1個あたりの価値は()円であり、剰余価値は()円であり、剰余価値率は()%となった。

3) 12時間の労働時間があった。1時間で1個の生産物が作られていた。1個の生産物の価値は600円であった。剰余価値率は100%であった。労働が二倍に強化された。このとき労働生産物は()個となり、1個あたりの価値は()円であり、剰余価値は()円であり、剰余価値率は()%となった。

これらの問題演習は学生から理解を高めるものとして評判は悪くない。『資本論』(第1部)の第6篇については、時間賃金・出来高賃金の計算練習も行っている。また、第7篇蓄積論においては、拡大再生産を経るあいだに増大する剰余価値の量を計算するという問題を行わせる。解答用紙は提出する必要はなく、授業中に問題を解かせ、そののち黒板にて解答のための計算方法を示すという方法をとっている。なお解答が正しかった場合は挙手をさせることにしているが、それを俯瞰するに正答率はすこぶるよい。

なお2019年度の前期に配置されている「政治経済学Ⅰ」で独自の無記名アンケートをとったところ、次のような結果が出た。(登録者44名、回答43名)

教科書は分かりやすかったですか。

1) わかりやすい (16名)

- 2) わかりにくい (6名)
- 3) 不必要だと思う (2名)
- 4) どちらともいえない (18名)
- 無回答 (1名)

教員の説明は分かりやすいものでしたか。

- 1) わかりやすい (18名)
- 2) わかりにくい (5名)
- 3) どちらともいえない (20名)

この結果をどうみるかは難しいが、教科書も教員の説明も全くわかりにくいものとは言えないということは分かる。

『資本論』第二部に関しては次のような問題演習が効果的である。また、政治経済学Ⅰではないが、第二部・第三部を教える後期の「政治経済学Ⅱ」では次のような問題を出しており、受講生には好評である。また次のようなテストも課しており、学生には好評である。

資本の形態にかんするテスト

資本とは、たえず形を変えながら増殖する価値である。その形態には三つのものがある。それは貨幣資本、生産資本、商品資本である。以下の物質がそのうちのどれであるか解答せよ。また生産資本だった場合、それが固定資本か流動資本かを答えよ。これら（どの形態にも）に当てはまらないものもある。また複数の解答を持つ問題もある。

- 1) 生協の販売店で売られているチョコレート
- 2) 工場のなかで生産中のチョコレート
- 3) チョコパフェを作っている最中のチョコレート
- 4) 銀行から引き出したお金
- 5) 銀行に預金してあるお金
- 6) 竣工直前の船
- 7) 客船として航行中の船
- 8) ペットショップで売られている猫
- 9) 肉牛として売られている牛
- 10) 土地の耕作のために使われている牛
- 11) 土地の耕作のために使われている馬
- 12) 馬刺し用として売られている馬
- 13) 銀行が保有している日本国債
- 14) 銀行が保有している紙幣
- 15) 労働者の給料として支払われる紙幣
- 16) 労働者の給料として振り込まれた預金
- 17) 雑誌『猫のきもち』の編集のために撮影されている猫
- 18) 雑誌『犬のきもち』の編集のために撮影されている犬
- 19) 工場で働かされている労働者

以上の問題には複数の解答であるものがあり、またどの形態にも属さないものも含まれている。それを解説するこの授業は学生の評判は悪くない。あるいはここには書かないが、差額地

代を解説して、土地所有者の獲得する差額地代の合計を出すといった計算問題を行わせるのも効果的である。

以上のような客観問題はたしかに授業の理解度を増す効果はある。しかし、それ以上のものではないのである。なぜかと言えば、経済学の最終目標は現状分析であり、『資本論』を理解するだけでは、直接的には現状分析には結びつかない。そして、客観問題を出題し、それを解答させるだけでは議論を行うことはできないのである。なぜかといえば、客観問題には解答は一つしかないものであり、そういう意味では異なった立場での討論の余地はなく、それゆえに優秀な学生の向学心を満足させるものとは言えないからである。この点については、参考として近代経済学の教科書をみることにする。

第4章 近代経済学のテキストとの比較

この章では、中谷巖『入門マクロ経済学』²¹⁾を参考として、従来のマルクス経済学との比較考察を行うこととしたい。近代経済学といえば、日本語に翻訳されたものだけでも多種のものが数えられる。たとえば、『マンキュー入門経済学（第二版）』（東洋経済新報社、2014年）²²⁾、『マンキュー経済学Ⅰ マクロ編（第3版）』²³⁾（東洋経済新報社、2014年）および『マンキュー経済Ⅱ マクロ編（第3版）』²⁴⁾（2014年 東洋経済新報社）などはテキストとしてよく使われる。米国の標準的なマクロ経済学・ミクロ経済学のうち日本語に翻訳されているものはこれ以外にも存在する。しかし、これら米国の経済学テキストは、米国の文化および学制を前提とした部分があり、それゆえマルクス経済学との比較は難しい。これら米国の経済学書の考察はとりあえず措き、日本人の中谷の執筆した『入門マクロ経済学（第5版）』とマルクス経済学の教科書を比較してみよう。

中谷巖の『入門マクロ経済学（第5版）』は、日本における近代経済学・マクロ経済学のテキストとしてもっとも多く読まれている。この本は16個の単元に分かれ、大学の前期または授業のコマ数（14コマもしくは15コマ）におおよそ対応している。そして長く版を重ねたことで、日本で経済学を学ぶ人々の教育のための工夫がゆきとどいている。そして、これは重要なことだが、教科書の政治的志向が、新古典派にもケインズ派にも偏っていないということが挙げられる。こうした特徴から本稿ではこの本を比較対照のための適切なテキストとして選ぶことにした。

なお、本稿はどの経済学が真理により近いか、という問題提起はしない。本稿が問題とするのは、なぜ近代経済学に学生が魅力を感じるのかということである。マクロ経済学の教科書を対象とするのはそのためである。それが学問的に真理であるということと、それが優秀な学生の関心を引き覚ますというのは別の事柄である。本書はその後者の立場からマクロ経済学の教科書の分析を行う。

まず中谷の『入門マクロ経済学』であるが、ひとつの例として第6の単元「 $IS-LM$ 曲線と財政金融分析」をとりあげてみよう（p.131より）。この分析手法はケインズの難解な『一般

21) 中谷巖『入門マクロ経済学 第5版』（日本評論社、2007年）

22) 『マンキュー入門経済学』（2014年、N グレゴリー・マンキュー、足立英之ほか訳、東洋経済新報社）

23) マンキュー入門経済学（2014年、N グレゴリー・マンキュー、足立英之ほか訳、東洋経済新報社）

24) マンキュー経済学Ⅱ マクロ編（2014年、N グレゴリー・マンキュー、足立英之ほか訳、東洋経済新報社）

理論』をヒックスがわかりやすく定式化したものである。IS曲線とLM曲線の導出はわかりやすく解説されている。そしてその交点において財市場と貨幣市場とがともに均衡しているという点もむかしの版から変わりはない。このテキストの特徴は、各単元末にテスト問題が配置されていることである。

第一は「理解度チェックテスト」である (p.149)。これは文章の穴のあいた部分に適切な用語を入れるというものである。たとえば以下のような問題がある。

IS曲線は、財市場を均衡させるような()と国民所得の組み合わせを描いた曲線であるのに対してLM曲線は()市場を均衡させるようなこれらの組み合わせを描いた曲線になる。

こうした穴埋め問題が13個もある。まず留意しなければならないことは、こうした単純な穴埋め問題が、学生の理解を大幅に助けるということである。これをばかばかしいと考えてはならない。日本の私立大学のかなり多くは、客観問題を用いて入学試験としている。国公立大学の入試であっても、マークシート式のセンター入試が用いられており、それが入試合格のための重要な条件になっているのである。したがって、そうした入学試験において合格を獲得しようとする学生は、客観問題の練習を通して、内容の理解を深めるという思考に慣れていているのである。したがって、穴埋め問題を軽視することはできないのである。

次に、同じ単元に「練習問題」が配置されている。たとえば、以下のようなものである。

1. ある経済は次のモデルで描写されるという。ここでY: GDP, C: 消費, I: 投資, L: 実質貨幣需要で単位は兆円。利子率rは%表示とする。・・・以下の問いに答えよ。

所得均衡式: $Y = C + I$

消費関数: $C = 0.8Y$

投資関数: $I = 200 - 10r$

- (1) IS曲線を求めよ。
- (2) LM曲線を求めよ。
- (3) 均衡国民所得と均衡利子率を求めよ。このとき、均衡国民所得は完全雇用を達成しないことを確認せよ。

こうした計算問題が多数掲載され、学生をより深い理解に導く工夫がなされている。言うまでもなく経済学において計算問題を行わせることは重要である。これは近代経済学だけでなくマルクス経済学にとっても重要である。すでに述べたように、剰余価値の量および率にかんする計算だけでなく、拡大された規模での再生産における剰余価値の蓄積量の計算も、あるいは再生産表式における計算、あるいは差額地代の計算方法などの練習は、学生をより深い理解へと導く。

しかし、『入門マクロ経済学』における演習問題はこれに尽きるものではない。各単元の最後に「ディスカッション・テーマ」が付されている。

1990年代の日本経済においては、財政政策の大がかりな発動が行なわれた。また、2001年から2006年にかけては「ゼロ金利政策」「量的緩和政策」といった大胆な金融緩和政策が

とられた。これらの政策はどの程度有効だったのだろうか。また、本章の $IS-LM$ 分析はこの時期の財政金融政策の効果を分析するツールとしてどの程度有効だったのだろうか。(この問題は、現時点では完璧に答えられなくてもよい。以降の各章で答えが徐々にみえてくる) (p.151)

以上がディスカッション・テーマの一つである。この教科書の各章の末尾にはこのような課題が付されている。まず言うておくべきことは、大学生にはこの問題に正しい解答を与えることはできないということである。上記に述べられているように、たしかに日本経済は1990年代から長い長期不況に陥っている。それはもはや30年も続いている。これに対して政府は大規模な財政出動や金融緩和を行っている。これも事実である。教科書どおりに現実が変化するとすれば、日本経済はデフレから脱し、大きな経済成長をなしとげるはずである。しかし現実はそのようになっていない。これは異常事態というべきである。プロの経済学者あるいはエコノミストで、この問題に最終的な解答を与えた者はいない。

もしマルクス経済学がこの問題に挑戦するとすれば、『資本論』(あるいは「経済原論」のテキスト)で示された法則のほかに、たとえば1970年代の長期不況、日本経済の独占資本主義化、国家独占資本主義とその崩壊、変動相場制、グローバル経済、規制緩和、階級構造の変化といったもろもろの思考の媒介ツールを通じて説明しようとするであろう。こういったからと言って、 $IS-LM$ 分析を軽んじているわけではない。それを虚偽の理論といているのではない。有効な分析のツールなのである。しかしそれを、なんの媒介もなく直接、現状の分析のために使うとすれば、それは平板な結論にしかたどり着かないであろう。つまり、この問題に対してマクロ経済学の教科書の概念のみを通じて説明しようとするれば、それは学問的にいって安易と言わざるを得ないであろう。しかし、学問的に安易であるということと、大学生の経済学教育に役立つということとは別個の事柄である。学問的に安易であっても、それが大学生の経済学教育に役立つことはあり得る。著者の中谷は、上記の文章でこう言っている。「この問題は、現時点では完璧に答えられなくてもよい。以降の各章で答えが徐々にみえてくる」と。以降の各章で示される概念は膨大である。しかしそれら概念を使って、日本の「失われた30年」を分析して論文を書くことは、少なくとも優秀な大学生のレベルでは魅力的な創造の作業になるだろう。そしてそのうちの幾割かは大学院に進み、そしてそのうちの幾割かは大学教員やプロのエコノミストになる。そして教育と研究の両面にわたって近代経済学が支配的となり、それは自然に「制度化」されることになる。

第5章 マルクス経済学における現状分析の方法

ではマルクス経済学として現状分析を行う場合、どのような方法を採用すればよいのか。たとえば正統派マルクス経済学の場合、現代の日本は独占資本主義段階であるという前提のもとに行う。このことは決してすべての研究者の共有するところとはなっていないのであるが、それは意識的あるいは無意識的に前提とされている。

しかし、現状分析を行うといったばあい、そうした経済学方法論を最初に確立したのは宇野弘蔵であろう。筆者は決して宇野理論に全面的な賛意を抱くものではない。しかし、宇野弘蔵は経済学の究極の使命である現状分析がいかに行われるべきかという点についてまとまった思想をもった初めての経済学者である。したがってここに宇野理論を参考にすることは決して間

違いではないと思われる。ここではあくまで参考のために宇野の経済学方法論を紹介してみることにする。

宇野派マルクス経済学はもともと『資本論』で示された経済法則を活かすという目的をもって生まれた。宇野派マルクス経済学の最終目標は「現状分析」である。しかしそのためには『資本論』から社会主義イデオロギーの要素を抜きとり、経済法則を循環されるものとして作り替える必要があるという。それが宇野弘蔵の『経済原論』である。そしてその上に「段階論」が据えられる。そして段階論の媒介を経て、「現状分析」が行われるのである。しかしこの現状分析は、そう簡単になされるものではない。宇野は次のように述べている。長くなるが引用する。

社会科学が政治の学問としてありながら直ちに技術的に利用せられるものではなく、また現実の分析に直ちに使用せられるものでもなく、先ずその経済学的原理をもって資本主義の世界史的発展段階を解明し、それによって初めて個々の国々の具体的分析をなし、しかもこの解明分析の過程においてようやく法律学的研究や政治学的研究と協力し得るということは、原理によってこれを直ちに技術的に利用しようとかが、或いはまたこれをもって直ちに現実の過程の分析をし得るというのに較べては、甚だ迂遠なことと考えられるかもしれない。しかし『資本論』において大体完成せられた経済学の理論をもってするならば、こういう方法しか学問的には成立しないのである。」²⁵⁾

宇野の述べるところは明確である。『資本論』といった原理的考察のうえに段階論をすえ、そのうえで現状分析を行うのが学問的な方法だということである。そしてその方法は、『資本論』から直接に現状分析を行うのに比べれば「迂遠」であるともいう。現代日本経済が、独占資本主義段階にあるのか、もしくは帝国主義段階にあるのか、それはいまは問題ではない。たとえば独占資本主義といった段階を経て現状分析を、正統派マルクス経済学においても共有されていると言いうるであろう。そういう意味では宇野のこの言説は、正統派マルクス経済学にとって異議を含むものではない。しかし宇野が上記で述べているように、現状分析に至るまでの道は「迂遠」であって、しかも他の社会科学的領域と連携しなくてはならないという。そうであるとすれば、日本経済の現状分析を行うことは、一介の大学生（あるいは大学院生）にとっては重すぎる仕事であるということになる。つまり日本経済の現状分析を行うためには、『資本論』（あるいは『経済原論』）をまず理解し、段階論的な考察を経る必要があるということになる。もしこの学問的過程を経済学教育に持ち込むとすれば、経済学教育の日の浅い大学生にとっては、現状分析は遠い目標となるであろう。経済学の現状分析を行おうと誠実に思えば思うほど、それは重いものとして大学生にのしかかってくるであろう。宇野理論の現実の教育課程でどれほどの圧力が大学生にのしかかっているかどうかは、浅学にして筆者の知るところではない。しかしマルクス経済学によって現状分析を行うことは、マクロ経済学によって現状分析をおこなうことに比べてより大きな苦難をもたらすであろう。マクロ経済学のツールをちよくせつ現状分析に役立てることは、大学生（あるいは大学院生）にとっては比較的たやすい、あるいは魅力的な創造作業であるかもしれない。しかしマルクス経済学の場合は決してそうではない。

25) 宇野弘蔵「社会科学と政治」（『思潮』1952年4月号、『宇野弘蔵著作集』第10巻、p.311）

むすびにかえて

本論考では、どの経済学が学問的に真理に近いかという問題は捨象した。この論考で問題としたのは、なぜ近代経済学が、あるいは主流派経済学が学生にとって魅力のあるものとして映っているのか、という問題である。いいかえれば、なぜマルクス経済学が魅力的に見えないのか、という問題である。それはマルクス経済学（正統派も宇野学派も含めて）が誠実に「迂遠」な方法をとっているゆえに、現状分析が厳しいものとなっているからである。近代経済学が魅力的であるのは、その現状分析が理論から「迂遠」なものではなく、簡略的な方法をとっているからである。

もしマルクス経済学が、その専門授業において理論の理解のみに集中しているのであれば、それは抽象的で無味乾燥ななりわいにしか見えないであろう。また、安易に現状分析を説明しようとするれば、それは理論からの無理なる飛躍と見えるであろう。あるいはまた、専門の授業において、段階論を経ることによって現状分析を試みるとすれば、理論の内容の説明はおろそかになるであろう。

本稿では、教育の側面からマルクス経済学の不人気の原因を取り扱った。しかし、この原因は、ただ経済学の教育の部に存在するだけでなく、マルクス経済学の研究の方法それ自身に由来するものと結論しうるのである。無論、だからといってマルクス経済学が正しくないと言っているわけではない。それはむしろ正しい。しかし大学生の教育にあたっては独特の困難があるということなのである。

本稿の主題は経済学教育論であるため、それに慣れぬ筆者のこの考察は、いささか大雑把なものとなったかもしれない。その点は寛恕をいただくしかない。ただ、この論考がマルクス経済学の不人気の説明のための一石を投じるものとなったとすれば、それは筆者にとって望外の喜びとするものである。

参考文献

- Marx,K [1894] *Das Kapital*, Band 1-3, in *Marx-Engels Werke*, Bd, 23-25. Diez Verlag, 1862-64. (資本論翻訳委員会訳『資本論』全3巻, 新日本出版社, 1997年)
- 宇野弘蔵 [1952] 「社会科学と政治」(『思潮』1952年4月号, 『宇野弘蔵著作集』第10巻に所収)
- 大谷禎之介 [2001] 『図解 社会経済学』(桜井書店)
- 大村泉ほか編 [2009] 『『学説史』から始める経済学 剰余価値とは何か』
- 小幡道昭 [2009] 『経済原論 基礎と演習』(東京大学出版会)
- 金子ハルオ [1968] 『経済学 上 資本主義の基本的理論』(新日本新書)
- 名古屋資本論講座ボランティア編 [2002] 『宮川彰 資本論講座 第2・3巻講義要綱』(ほっとブックス新栄)
- 林直道 [1970] 『経済学 下 帝国主義の理論』新日本新書
- 原島正衛・勝村務 [2016] 「新聞活用授業の展開」(『北星論集(経)』第55巻第2号)
- 宮川彰 [2006a] (『『資本論』第1巻を学ぶ 宮川彰 講義録』ほっとブックス新栄)
- 宮川彰 [2006b] (『『資本論』で読み解く現代の貧富の格差—宮川彰「資本論」集中講座講義録』(ほっとブックス新栄)。
- 宮川彰 [2006c] 『学びたいあなたのための『資本論』Q & A 222問 -宮川彰-「資本論」講座Q & A -』(ほっとブックス新栄)
- 宮川彰 [2001a] 『『資本論』第2・3巻を読む 上』(学習の友社)
- 宮川彰 [2001b] 『『資本論』第2・3巻を読む 下』(学習の友社)

- 八木紀一郎ほか編 [2015]『経済学と経済教育の未来 日本学術会議<参照基準>を超えて』(桜井書店)
- 八木紀一郎 [2019]「日本アカデミズムのなかのマルクス経済学」(『現代の理論』第16号)
- 山根栄次 [1988]「中学校におけるマルクス経済学に基づいた経済教育の問題—安井俊夫氏の「利潤が生まれるわけ」の授業を参考として—」(『筑波社会科研究』第七号)
- 雑誌『経済』編集部 [2013]「『資本論』と経済学教室の60年 労教協の学習運動をふりかえって 辻岡靖仁さんに聞く」(雑誌『経済』212号, 2013年5月)
- 中谷巖 [2007]『入門マクロ経済学 (第5版)』

(2019年10月10日受理)